

キリスト教神学

第4章 神学と聖書の批評的研究

一宮基督教研究所
安黒務

「キリスト教神学」 概略

1. 神を研究すること
2. 神を知ること
3. 神はどのような方か
4. 神は何をなされるか
5. 人間
6. 罪
7. キリストの人格
8. キリストのみわざ
9. 聖霊
10. 救い
11. 教会
12. 終末

第1部 神を研究すること 概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

第4章 神学と聖書の批評的研究 概略

- 序論
- 1. 様式史批評
 - 1. 背景
 - 2. 原理
 - 3. 様式史批評の評価
 - 4. 様式史批評への批判
- 2. 編集史批評
 - 1. 研究の展開と特質
 - 2. 編集史批評への批判
 - 3. 編集史批評の評価
- 3. 構造批評
- 4. 読み手応答批評
- 5. 批評学的方法を評価するためのガイドライン

序論

1. プレモダンからモダンへの移行期: 批評学的方法
2. 歴史編纂 - 歴史的批評
3. 聖書の各巻に適用 - モーセ五書「文書資料説」
 1. J, E, D, Pの異なった文書資料
 2. モーセ時代以降に構成
 3. 歴史的説明に不正確さ
 4. 後代に属する部分と初期に属する部分
4. 聖書全体をふるいにかけて真偽の判断の必要
 1. 本文批評 (textual criticism)
 2. 文献批評 (literary-source criticism)
 3. 様式史批評 (form criticism)
 4. 編集史批評 (redaction criticism)
 5. 歴史的批評 (historical criticism)
 6. 比較宗教批評 (comparative-religions criticism)
 7. 構造批評 (structural criticism)
 8. 読み手応答批評 (reader-response criticism)
5. 聖書の内容と歴史的現実の関係に関する問い
6. 批評学における方法論 - 選択的に検討

第1節 様式史批評 背景

1. 一番最初に記されたのがマルコ
2. 文書の背後に口伝の伝承 (oral traditions)

第1節 様式史批評 原理

1. イエスの物語と言葉
2. 自己完結的資料群 - 文学様式により分類
3. 分類後、階層ごとに分けられる
 1. 口伝のたどる一般的な過程や道筋
 2. 大学新聞の四コマ漫画
 3. 福音書資料についての幾つかの結論
4. 初代教会における「生活の座」の確定
 1. ルドルフ・ブルトマン
 2. 「史的イエスの新しい探求」

第1節 様式史批評

様式史批評の評価

- 様式史批評の果たした肯定的な貢献
1. イエスの行為・言葉と付き従う信仰者の不可分性の指摘
 - 信仰に重要でないものは描き出さず
 2. 福音書は信仰者の”集団”により作成されたとの指摘
 3. 組み込まれた資料、選択、直面していた状況からの学びの指摘
 4. 諸前提が聖書記者の視点に反しない場合、確証する助けとなる

第1節 様式史批評

様式史批評への批判

- 様式史批評の前提・適用...多くの問題
 1. 「記者は歴史にさほどの関心なし」との前提
 1. 歴史において働かれる神の世界
 2. 目撃者の数が減り始めていた
 2. 「記者は信頼性に欠ける人物」との仮定
 1. 真実性に高い価値を置く人々・記憶力の強靱さ
 2. 「反復における復元」「記憶の連鎖」
 3. 様式を階層化する試み - 失敗に終わる傾向
 - 幾つかの前提 - さらに検討を要する
 4. 伝承の組込・創作 - 「生活の座」により説明できると仮定
 - 教会に不利な事柄が記述 - 記者の誠実さ
 5. 「独自性」が真正性の基準と仮定
 6. 「聖書が靈感されたものである」との可能性なしと仮定
 7. 「目撃者が記録した」ことは無視されている
- 様式史批評: 資料の歴史性を評価する能力は低い

第2節 編集史批評

研究の展開と特質

1. 様式史批評・伝承批評・編集史批評の関係
2. 様式史批評と編集史批評
3. ボルンカム、コンツェルマン、マルクセン
4. ルカ福音書：歴史的関心・著述家の模範
5. 三つの生活の座
 1. イエスが最初に語り、行動した状況
 2. 初代教会が宣教活動において直面した状況
 3. 福音書の働きと目的における状況
6. 枠組み・伝承の様式・記者の立場や視点に焦点
7. 「記者はイエスの言葉・行動に関心もたず」との仮定
8. 個々の資料の非真正ではなく、その真正性
9. より急進的な編集史批評学者たちは...
10. ウィリアム・ウォーカー：編集資料を伝統的資料から区別する段階の一覧表

第2節 編集史批評

編集史批評への批判

1. 「記者は神学的目的・方法をもつ人々」との仮定
2. 「特定の聴衆・特定の問題を念頭に語られている」との仮定
3. 言語や文体という基準がもつ効力は多様
4. 「編集句からのみ判断される」と仮定
5. 福音書の状況や目的を調べることに限定される

第2節 編集史批評

編集史批評の評価

1. 真正性の基準がより理にかなうなら
2. 広義と狭義の意味
3. 限定された範囲で使用する
 1. 聖書本文の真実性を実証する助けとなる
 2. 記者の強調した特定の事柄を判断する助けとなる
 3. 共観福音書の問題を解決する助けとなる
4. 受け取った資料のコンテクスチャリゼーションの洞察を得る
5. 記者たちの働きには解釈が含まれる
6. 「彼自身の言葉」ではなく「彼自身の声」
7. アラム語で語られ、ギリシャ語に翻訳された
8. 保守的な理解と懐疑的な理解とを区別する方法

第3節 構造批評

1. 新しい方向転換の兆し
2. 言語学者ソシュールと人類学者レヴィ=ストロース
3. 文芸評論家マーレー・クリーガー
4. 「聖書神学運動」の崩壊
5. 方法論: 根本的に自然主義
6. 共時的・垂直的に見る
7. 釈義学者の方法論的前提: その文化に属する
8. ラング(言語体系)とパロール(発話行為)
 1. 著者の具体的な状況 - 「発音の構造」
 2. 「文化的構造」「文化的諸規定」による制約
 3. 「深層構造」 - 著者あるいは話し手に自らを押し付ける制約
9. 深層構造: 物語構造と神話的構造
10. 構造主義の短所: アンソニー・シセルトン
 1. 初期、ある程度の客観主義が存在
 2. 結果の有益さ等についての疑問
 3. 思想にあまりにも多くの修正

第4節 読み手応答批評

1. テキストと読者相互間を重視するアプローチ
2. ポストモダンの批評学は:バーネット
3. スタンレー・フィッシュ:最も急進的
4. このアプローチの主観性
5. 客観化が行われる要素
6. フィッシュほど先に進んではいない
7. ファウル:意味についての議論をあきらめる
8. ポーター:方法論の活用に欠陥がある
9. テキストの中に意味を置く 読者の中に位置づける
 1. 意味の問題はすべてのテキストに適用される
 2. 言語に対する規定的なアプローチという誤り
 3. 主観主義につきまとう傾向は解決されず
 4. 物語哲学以上ものではない

第5節 批評学的方法を 評価するためのガイドライン

1. 反超自然的な意味をもつ前提に警戒
 2. 循環論法の存在を見つける必要
 3. 根拠のない推測に対する警戒
 4. 恣意性や主観性に気づく必要
 5. 信仰と理性は対照的關係という前提に警戒
 6. 確実性より蓋然性である
- 聖書批評学はその成果において否定的である必要はない
 - 聖書の十全な権威と一致した前提を基盤とするなら、聖書の意味の上にさらなる光をもたらす有用な手段となりうる